

# 欠陥問題での法務の役割は何か？その2

鳥飼総合法律事務所 弁護士 鳥飼重和

今回は欠陥問題を考える場合には、長期的成長の視点から、安全よりも、安心の方が経営者にとって重要なのではないかと述べた。顧客・社会の人々の安心が、企業に対する信頼の基礎となるからである。すなわち、会社は専門的にみて安全であるといっても、社会的にみて安全だといえない場合には、顧客・社会の人々は、この安心できない状態を解消せず、安全であると叫ぶ企業に対し、信頼感を喪失する可能性がある。この信頼を失う可能性は、企業の長期的成長の基盤を揺るがす経営危機の問題なのである。

顧客・社会の人々が安心できないときに、企業が安全であると叫ぶのは、仮に企業の主張が正しかったとしても、企業にとって、致命傷になりかねないことを招く危険をみずから犯していることに他ならない。欠陥問題等のクレーム対応は、むしろ、会社の長期的成長に活用すべきことであるのに、その対応で、会社の危機を増大させることは、本末転倒である。

その原因はどこにあるのか？帰するところ、経営者にリーガルマインドがないからではないだろうか。リーガルマインドは、法律的素養などと翻訳されているが、社会常識を伴った法的判断のことを言う。一般的には、「法的判断」だから「法律的裏付け」をもった判断と思われるようである。つまり、法律の根拠を伴った判断ということである。

しかし、「法的判断」をそのように狭く考えることはない。重要なのは、経営者が判断する場合に、実用的に使えるものとして法的判断を捉えるべきことである。社会の実用なくして概念を捉えるのは、言葉の遊戯であり、言葉を非実用的なものとする危険があり、有害でさえあるからである。法的判断を実用的に捉えると、法的判断のエッセンスは、論理的思考ということに尽きる。その実用性は、次のような点で発揮できる。

欠陥問題で最も重要な問題は何か、を考える発想につながる。重要な問題を解決すれば、それから派生する問題の解決の道筋ができるからである。しかも、この重要な問題を正しく捉えられれば、問題に対して、もっとも適切に対応できる。これは、論理のもっている解決力から来るのである。論理は明確な方向性を示し、反対を封殺する力をもっているので、混乱を防止し、問題を解決するからである。

また、最も重要な問題が分かれば、その問題解決に要求される基準が分かるのも、論理の導きによる。解決する基準を知ることもリーガルマインドの一内容である、法的思考である。法的思考は論理的思考であり、問題の解決には、それを解決する基準を立てることを要求するからである。そして、問題解決の基準を立てると、最も重要な問題の解決の方向性が明確となる。

今回は問題解決の基準を立てるというリーガルマインドの実用性について述べることにしたい。

鳥飼重和（とりかい しげかず）

税理士事務所勤務後、司法試験に合格。日本税理士会連合会顧問。専門分野：内部統制・役員責任を中心とした会社法。税務訴訟を中心とした税法。主著書：『内部統制時代の役員責任』（共著、商事法務、2008）、『「考運」の法則』（同友館、2009）など他数。